

2009年10月27日発行

# ぶろす

四季の会・ユーザーズ・サービス

265号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 菊薫る候、先生におかれましては益々ご健勝のことと存じます。

公認会計士の就職難で税理士会も大変さが出て来たようだ。税理士のお客様である小企業の減少化の中で、税理士は益々増えているのです。公認会計士の最大の要因は、監査法人の経営難である。最大手の「新日本」は、2009年6月期の決算で純損失16億円と赤字に転落した。(朝日10/26)

2008年9月の金融危機後、企業の新規上場が急減、上場をやめる企業も相次ぎ監査法人の顧客が減り始めた。去年までの大量採用が人事が余ってしまった。10月上旬に日本公認会計士協会の増田宏一会長が、金融庁に亀井静香金融相を訪ね、厳しい就職状況を訴えたりしている。

政府は、今まで監査法人の役割の重要性の中で、約10年後に5万人まで増やす計画で合格者を増やして来た。その中で増田会長は「就職が厳しいとなると受験生が減って優秀な人材が集まらなくなる」「会計士の増やし方のペースを抑えるべきだ」と監査法人の経営基盤を安定させることを求めた。

そうした言動には、既得権を守る動きだとの批判もある。公認会計士の不祥事が相次いでいる。金融庁は今のところ、会計士を増やす方針は変えずとのことである。となると一般企業に公認会計士の就職でも増えないと、税理士業界に大きな問題になってくるのです。税理士は益々「サービス業」化が大事のようです。

## 「ひやかし客」を大切にせよ?!

「小売業やサービス業」にとって怖いのは、不満があっても黙って立ち去る客である。何が気に入らないのか言ってくれないと改めようがないのです。二度と利用してくれないだけでなく、口コミによる「あの店は駄目だ」という悪評が恐ろしいのです。

その点、常連客はありがたい。多少のことは大目に見てくれるし、気がついた問題

を指摘してくれそうです。だが上得意に頼りすぎると商売は拡大しないのです。明治期に三越の基礎を築いた経営者の日比翁助は「商売繁昌の秘訣」のなかで「ひやかし客を大切にせよ」と述べています。ひやかし客の多い店ほど発展するのです。

見るだけの客も気持ちよく帰せば、「三越に初めて行ったが、待遇がよかったとか、買い物をしないが丁寧に扱われたという評判を立てられる」。好印象を持った客はいずれ買い物に必ず来てくれるという読みで成功したのです。(日経 春秋9/2より)

こんな考え方を会計事務所に取り入れてみるのが、大事のようです。会計事務所「小セミナー」とか「小勉強会」「出張セミナー」「出前セミナー」などを開いていくのです。横浜のYMG林会計、林充之先生は、「経営に役立つ出張セミナー」の開催が好評です。顧問先で行う。顧問先の人たちだけでなく、その会社の取引先や友人の方をご招待します。そのテーマは、経営者が身近なことで関心を持ってくれるものに「決算診断」があるのです。「決算書の見方・活かし方」「キャッシュフロー計算書の見方」「超簡単経営計画」などを非常に喜ばれるのです。地域への貢献です。

はじめて見る「決算診断提案書」また、「参加した会社の決算書を持参し帳票にされたりする」と、目からうろこの落ちるようなことがあります。「決算診断システム」が経営者の「心を揺さぶるような物差し」になっていくのです。経営者は孤独です。決算報告などコミュニケーションされない会計事務所が多いのです。

この小セミナーを通して、経営者に喜んでもらえることになり、決算診断で貢献していくのです。自分の会社の経営問題を相談する相手は他にいないのです。私たちが唯一、経営者の身近な存在であることを語っていきけるのです。正に「経営コーチ」です。

三越の基礎を築いた経営者の日比翁助の「ひやかし客を大切にせよ」ではないが、1年後・2年後でもいいから、いつかは顧問先になってくれるかも知れないのです。浅沼経営センターも、そんな考え方で実践してお客様を増やし、成長してきたのです。「決算診断」はまさに、「経営者の心を揺さぶる物差し」になっているのです。是非、自信をもってやってみてください。

## 人は行きづまることはない!

「人間は行きづまるということは絶対にない。行きづまるというのは、自分が“行きづまった”と思うだけのことである。」これは知謀でくぐり抜けた、松下幸之助の言葉です。

知謀沸くが如し - 致知.2009.11 - を参考にしました。今や経営者にはかつてない予期せぬ事態が起きていると思うのです。この局面で打開しなければならないと思うのです。そんなつもりで読んでみて下さい。

日露戦争の帰趨を決した日本海海戦。当時屈指の戦力を誇った。ロシアのバルチック艦隊を破った海軍大将・東郷平八郎は、

「知謀、沸くが如し」を座右の銘にしていたという。

戦場では常に予期せぬ事態が起こる。だがいかなる場合にも、将たる者、泉のように知恵を沸かせ、局面を打開しなければならぬ。東郷は自ら素晴らしい聞かせていたのだろう。これはリーダーの必須の心得であり、条件であるのです。歴史はそのようなリーダーの事例に満ちている。いまNHKで放送中の大河ドラマ『天地人』の主人公・直江兼続も知謀の人である。

兼続は人を魅了する何かを備えた人物であつたらしい。幼少期は上杉謙信に愛され、薫陶を受けた。長じて太閤秀吉に気に入られた。兼続が仕える上杉家が越後から会津に転封された時、石高百二十万石のうち、兼続は特に米沢三十万石を与えられている。陪臣にしては破格の扱いである。

関が原の戦いで、兼続は徳川方に味方した山形城の最上義光を攻めた。二十二の砦を落とし、最上最後の拠点に攻めかかろうとした時、「関が原で家康圧勝」の知らせが入る。兼続は瞑目した。

だが、それは一瞬だった。直ちに囲みを解いて米沢に引き揚げる。それからの行動も素早かった。上杉家安泰を困るため、主君の許しを得て家康のいる大阪城に向かい、面会を願い出る。

自分に楯突いた男がどの面提げて、と興味を持ったのだろう。家康は面会を許した。周りの諸将も冷ややかなあざけりの目を投げてくる。兼続は上杉家の安泰を願い出た。だが、取り潰しは規定のことである。許されるわけがない。兼続は粘った。一途でひたすらだった。

その態度に家康は心が動いたらしい。上杉家とともに葬ってしまうには惜しい人材と兼続を見たこともあるのだろう。上杉家取り潰しは変らないが、兼続の米沢三十万石はそのまま許す、となったのだ。兼続は深く頭を垂れていった。

「有難き幸せながら、その儀は返上させていただきます」。怪訝そうな面持ちになる家康。兼続はさらにいった。

「ただし、私が一旦返上いたしました米沢三十万石は、主人上杉景勝にお与えいただきとうございます」。

周りはどよめいた。どうしたものか、と側近の本多正信を見る家康。兼続はその本多に目を向け、更に驚くべき申し出をする。本多の子息政重を自分の養子に、というのである。政重は不肖の子で、関が原では敵方に属し、処断は免れない立場なのである。

家康はニヤリと笑っていった。「直江、さすが故太閤殿下が目をかけられただけの器量を持っておられる。いや、器量というよりも知謀というべきか」。

兼続の申し出は承諾された。かくて上杉家は生き残ったのである。兼続、知謀の限りを尽くした戦いであつた。

この人も幾度転を知謀でくぐり抜けた松下幸之助の言葉。

「人間は行きづまることはない。行きづまるというのは、自分が“行きづまった”と思うだけのことである」。